「HIV 挿入」、捏造、そして「研究所流出」

マーク・J・ベイリー

2024 年 6 月 2 日

（翻訳：Lihsia リーシャ 2024 年 6 月）

この記事では、COVID-19 の「研究所流出」と「HIV 挿入」というシナリオの起源と、それらが複数のパンデミック産業で利用され続けている理由について解説している。また、1984 年に初めて報告され、「HIV」に起因するタンパク質である gp120 を検証しながら、現在に至るまでのウイルス学的詐欺の伝播について解き明かしている。

2020 年 1 月 31 日、Pradhan et al. (プラダンほか)は、論文『Uncanny similarity of the unique inserts in the 2019-nCoV spike protein to HIV-1 gp120 and Gag（2019-nCoV スパイクタンパク質の HIV-1 gp120 および Gag に対する特異的挿入部分の驚くべき類似性)』をプレプリントサイト bioRxiv.[1] (いわゆる「バイオアーカイブ」）にアップロードした。そのわずか 2 日後、「この論文は著者によって撤回された。著者らは、その技術的アプローチと結果の解釈についてリサーチ・コミュニティーから寄せられたコメントを受け、修正する意向である」[2] という説明とともに削除された。短い掲載期間にもかかわらず、2024 年 5 月現在、ウェブサイトの指標によれば、この論文は 116 のニュース媒体に取り上げられ、ウィキペディアでは 7 つの項目で言及され、オンライン PDF 版は 48 万回以上アクセスされている[3]。

2020 年 2 月 2 日、ZeroHedge (ゼロヘッジ) は、Pradhan et al. (プラダンほか) のプレプリント論文を、『Coronavirus Contains 'HIV Insertions', Stoking Fears Over Artificially Created Bioweapon (コロナウイルスは「HIV 挿入」を含み、人工生物兵器をめぐる恐怖を煽る)』と題した記事で大々的に宣伝し、約 170 万もの閲覧回数を記録した[4]。これは、ZeroHedge の 2020 年 1 月 29 日の記事で、110 万回以上のアクセス数があった[5] 『Is This The Man Behind The Global Coronavirus Pandemic? (世界的なコロナウイルス・パンデミックの背後にいるのはこの男か？)』に続くものである[5]。筆者(ら)*[6] は、武漢ウイルス研究所の Peng Zhou が「コロナウイルスのパンデミック」の黒幕であることを示唆している：

> *中国をはじめ世界中で大勢の人々を感染させたコロナウイルスのパンデミックの真の原因を知りたければ、Dr Peng を訪ねるのが近道だろう。あるいは、e メールを送ること：Dr. Peng の連絡先は peng.zhou@wh.iov.cn、電話番号は 87197311.[7]。*

これは、WHO (世界保健機関) の事務局長が「COVID-19」を「パンデミック」[8] だとして宣言する 6 週間前のことである。そして私のリサーチ仲間が、Peng Zhou チームに連絡を取ったのは、彼らが、『A pneumonia outbreak associated with a new coronavirus of probable bat origin (コウモリが起源と思われる新型コロナウイルスに関連した肺炎集団発生)』と題した論文を 2020 年 2 月 3 日付けの Nature (ネイチャー)誌にオンラインで発表し

た後のことだった[9]。これが、後に“SARS-CoV-2”と命名される 2019-nCoV の存在を証明したと主張する中国発の最初の論文の一つである*[10]。彼らが主張する「ウイルス」分離に関する異常な科学的詐欺は、私のリサーチ仲間によって暴露され、『A Farewell to Virology (Expert Edition) 日本語版：ウイルス学との訣別（エキスパート編)』の中の "The Disclosures Of Peng Zhou et al. (驚くべき Peng Zhou et al.論文詳細)" に詳述されている[11]。例によってウイルスの特徴を満たす粒子を物理的に分離出来なかったことはもちろんだが、彼らは実験細胞株に添加する抗生物質の量を 2 倍に増やしたことを認めている。

2020 年 2 月 7 日、ウェブサイト FactCheck.org は “Baseless Conspiracy Theories Claim New Coronavirus Was Bioengineered (根拠なき陰謀論、新型コロナウイルスは生物工学的操作の賜物)” と題する記事で、「HIV 挿入」の話に飛びついた[12]。それまでの全ての記事同様、新たな「コロナウイルス」が存在するかどうかについての議論はなく、むしろそれは当たり前のこととして紹介され、一般市民に提起された唯一の疑問は、ウイルスとされるものの起源であった。FactCheck.org の要約にはこうある：

> *ネット上の記事の中には、新型コロナウイルスが HIV の「挿入部分」を有し、研究所で作られた形跡があると誤って伝えているものが数件ある。しかし、この新型ウイルスが生物工学的に作り出されたものであるという証拠はなく、あらゆる点から動物由来であることが示されている[13]。*

この「研究所流出」説は、様々な主流メディアで 4 年間取り上げられ、それを支持するかどうかは別として、2023 年までには、60%以上のアメリカ人が「ウイルス」は研究所から発生したと考えていることが Washington Post (ワシントン・ポスト) 紙に報じられた[14]。ところが、CHD (Children's Health Defense) などの組織は、一般市民はこうした事実を知らされていないと主張している。2023 年 12 月 5 日、ロバート・F・ケネディ・ジュニアと CHD は『The Wuhan Cover-Up：And Terrifying Bioweapons Arms Race[15] (武漢の隠蔽工作：恐怖に満ちた生物兵器開発競争)』と題する本を出版し、SARS-CoV-2 が病原体として存在するだけでなく、研究所で生み出され、新型の病気を引き起こしたという見解をより強固なものにした。筆者は、「健康の自由」を掲げる人たちの多くが、CHD が主張する「隠蔽」といった要素を依然として支持していることを指摘する*[16]。また、次の点については明白である：(1)「研究所流出」説は綿密に練られたもので、「パンデミック」の初期には既に存在していた (2) 武漢ウイルス学研究所は中国政府*[17] と主流メディアで広く取り上げられていた (3)いわゆる「隠蔽工作」は、大多数のアメリカ人が知っている。これに関して、オンライン百科事典 Wikipedia（ウィキペディア）には、かなり詳細な “COVID-19 lab leak theory (COVID-19 研究所流出説)” の項目が設けられていることも留意すべき点である[18]。そこには、この問題は研究所ウイルスがいかにしてパンデミックを引き起こしたかということに行き着くのではないか、とさえ思わせるような記述がある：

> *科学史家の Naomi Oreskes (ナオミ・オレスケス)は、ウイルスが意図的に放出されたという説を支持する科学者の中で信頼出来る人物を知らないと言い、ウイルスが偶発的に逃げ出したのではないかという説の方がもっともらしいと述べている[19]。*

筆者の目からすると、ZeroHedge*[20]のような金融・政治系ブログサイトが、なぜ2020年1月に「コロナウイルスの蔓延は、研究所から偶然漏れ出たウイルスが兵器化されたものではないのか」[21]といった趣旨の記事を掲載し始めたのか、現在では推測の域を出ない。私たちはこれまで、こうした「機能獲得」や「生物兵器」などの話の背後にある根拠なきウイルス学的主張を、それらが拠り所としている関連科学文書を骨抜きにすることで論じてきた[22]。私たちの見方では、この手のシナリオは、ウイルス学者の主張に惑わされた人や 、「ウイルス」や伝染病の存在を維持するためにガスライティングしている（あるいはガスライティングされている）人らによって広められることがほとんどである。

2024年5月2日、ZeroHedgeは『Watch Live：Peter Daszak[23] Testings Days After Whistleblower Documents Exposed More About the Dangerous Wuhan Research（ウォッチ・ライブ：ピーター・ダスザック、武漢の危険な研究に関する内部告発文書が発覚した数日後に証言)』という記事で、5年連続で人工ウィルスの話を展開している。

> *一方、月曜日になって、ジャーナリストのPaul Thacker（ポール・サッカー）が、ダスザックの研究に疑問符を投げかける新たな資料と、危険なキメラウイルスを作り出すために武漢ウイルス研究所で行われた危険なウイルス研究に資金提供したことを示す文書に関する米国立衛生研究所の発言を明らかにした[24]。*

Pradhan et al.（プラダンほか)や、Richard Fleming（リチャード・フレミング)医師 / 博士のような発言力のある人たちの興味を引いた「HIV gp120挿入」やその他の「疑わしい」配列に関する言及はなかった[25]。ZeroHedgeの最新記事には、議会の証言、国立衛生研究所の助成金、およびPeter Daszak（ピーター・ダスザック）のEcoHealth Alliance（エコヘルス・アライアンス)と武漢ウイルス学研究所の活動について触れられている。いずれも、次のような見解を主張している：(1) COVID-19はパンデミックであり、(2) SARS-CoV-2が原因であり、(3)「コロナウイルス」を用いた実験が行われている。事実、ZeroHedgeの記事で特集された議会公聴会のビデオの中で、Raul Ruis（ラウル・ルイス)[26]下院議員は、「ウイルスが研究所由来なのか、自然界からのものなのかはまだ不明である」と述べている。連邦政府機関の2つは、ウイルスが研究所で作られたものであるとの確信度は未だに低く、中程度であると評価しており、政府機関の4つは、ウイルスが自然界から発生したものであるとの確信度は依然として低いと」[27]報告している。

2020年、私たちはSARS-CoV-2の証拠がないこと、ヒトの診断検査としてポリメラーゼ連鎖反応（PCR）が不適切に使用されていること、そしてWHOによるナンセンスな症例定義に関する不正を暴くことで、COVID-19の「パンデミック」はその年の終わりまでに終息すると本気で信じていた。振り返れば、私たちは当時、このウイルスモデルが製薬、バイオテクノロジー、ゲノム産業、そして「バイオセキュリティー（生物学的脅威からの安全保障)」監視国家の構築のにとって欠かすことの出来ない重要なものであることを理解していなかった。

つまり、「代替」理論とは、ウイルスモデルを堅持することを条件に、国家とその傘下にある集団によって認められ、更には推進されているものだということである。そこで再び、Pradhan et al. (プラダンほか)が 2020 年 1 月に発表した論文に立ち返るが、これは、SARS-CoV-2 が人工ウイルスであったという説が生まれるきっかけの一つとなったものだ。このシナリオは、ウイルスモデルやパンデミック業界の恩恵を受ける者にとっては全く問題にならなかったであろう。このケースでは、主張された gp120 の特性、すなわち主にタンパク質とそれに関連する遺伝子配列が「HIV」に属するということに関係していた[28]。

しかし、実際に gp120 がどのウイルスに属するかを示す証拠はどこにあるのだろうか？1997 年、Bess et al.（ベスほか）は『Microvesicle Are a Source of Contaminating Cellular Proteins Found in Purified HIV-1 Preparations（マイクロベシクルは HIV-1 精製物に含まれる汚染された細胞性タンパク質の供給源である)』と題する論文を発表し、その中で「HIV-1 粒子は一部の細胞性タンパク質を持つことが知られているが、HIV-1 が感染した H9 細胞からのマイクロベシクルには HIV-1 の gp120SU［SU＝surface（表面）envelope（エンベロープ)］はほとんど、または全く含まれていないようであった」と述べている[29]。この論文では、「精製された HIV-1」と謳われている調製物の電子顕微鏡写真も掲載されており、これが The Perth Group（ザ・パース・グループ）の Eleni Papadopulos- Eleopulos (エレニ・パパドプロス＝エレオプロス)の目に留まり、彼女は 1997 年 8 月にこう述べている：

> *…1997 年 3 月まで、理由は不明だが、［Luc Montagnier（リュック・モンタニエ）や Robert Gallo（ロバート・ギャロ)］のグループも他の誰も、バンド状の（精製された）物質の電子顕微鏡写真（細胞粗培養で観察される様々な粒子のどれが 1.16gm/ml で存在するのかを示すもの）を発表したことはなかった[30]。*

Bess et al.（ベスほか）は、SDS-ポリアクリルアミドゲル電気泳動法[31]による H9 細胞株の分析[32]結果を発表した。最初の細胞株（A)は「HIV」に感染していないとされ、次の細胞株 2 つ（B と C)は「HIV」に感染しているとされた。The Perth Group は、この論文に対して 2011 年に詳細な解説を発表し、ゲル電気泳動データの意味を以下のように要約した：

この 3 つのゲルの電気泳動パターンがほぼ同じであることは誰が見ても一目瞭然である。[Brent]Leung（［ブレント・リァン）[33]は 42.7kDa のマーカータンパク質の真下に線（図 1 の青線）を引いたが、この線より上のゲルは全く同じである。この線より下のゲル B および C では、ゲル A と比較して染色濃度にわずかな違いがある… 3 つのゲルとも同じタンパク質が存在するが、その量には多少の差がある。ゲル A、B、C には同じタンパク質が存在するため、B と C には「余分な」タンパク質は存在しないと結論せざるを得ない。すなわち、HIV タンパク質は「精製されたウイルス」には存在しないということである。
HIV タンパク質がない＝HIV がない、という意味である。ではなぜ、ゲル B と C で Bess（ベス）は p6/p7、p17、p24 を HIV タンパク質と表記したのだろうか[34]、[35]。

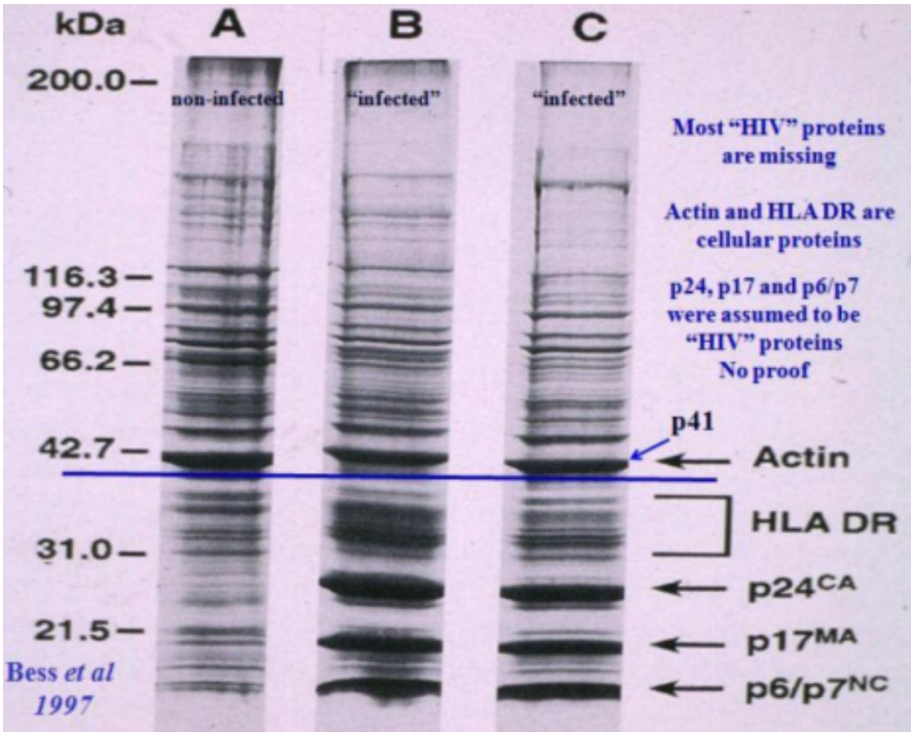

図 1.　Bess et al. (ベスほか)、Virology (ウイルス学) 1997 年、ゲル電気泳動データ（2011 年 The Perth Group (ザ・パース・グループ)によるコメント）：A＝未感染、B、C＝「感染」。

本稿と、gp120 が HIV に特異的であるという主張に関連して、Bess et al.（ベスほか）1997 年のゲル電気泳動に立ち返り、120kDa のバンドを検証すると興味深いことがわかる。図 2 から明らかなように、非感染細胞(A)、「感染」細胞(B と C)にかかわらず、3 つのゲルとも 120kDa 付近にバンドが観察された。つまり、この実験では gp120（またはこの大きさのタンパク質）が「HIV」に特異的であるという証拠はなく、それは細胞性タンパク質としか言いようがない。

Bess et al. (ベスほか) のゲル電気泳動は、HIV に特異的なタンパク質を検出したという彼ら自身の主張を反証するものであった。彼らはこの結果について何の説明もせず、代わりにラジオイムノアッセイ（放射免疫測定)によるタンパク質の*相対的*な濃度を分析した。その結果、「HIV-1 粒子よりも若干高い密度でバンド形成された微小小胞に、微量の gp120SU が関与している可能性を示す証拠がある」と結論づけた[36] [筆者による強調]。このコメントは別の意味で「HIV 特異性」の問題を提起しているが、それは、彼ら自身の方法論でさえ、「HIV エンベロープ」の一部だと主張するタンパク質が、想像上の「ウイルス」に「感染」していない細胞でも見つかるという決定的な欠陥を無視したものである*[37]。

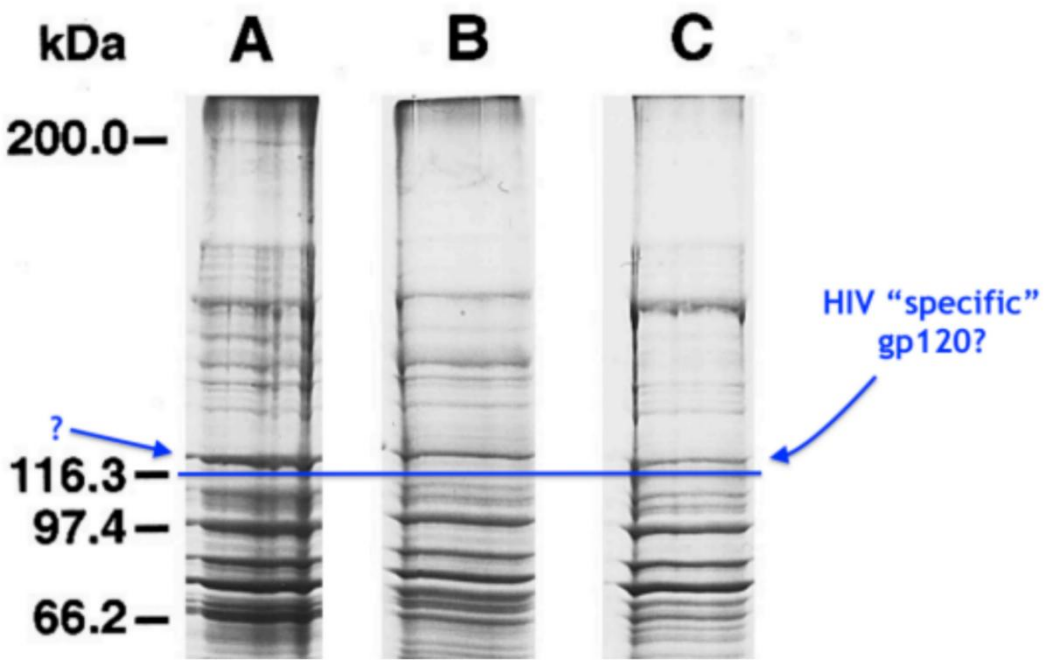

図 2. Bess et al. (ベスほか)、Virology (ウイルス学) 1997 年、116.3kDa のマーカータンパク質に注目したゲル電気泳動データ： A＝未感染、B、C＝「感染」。

「SARS-CoV-2」に「HIV が挿入されている」という主張は、正に何十年にもわたるウイルス学的疑似科学のプロパガンダを象徴するものである。Peng Zhou チームは、最初からウイルスの証拠がなかったため、ウイルスを工学的に作り出すことは不可能であった[38]。それは「HIV」の証拠がないのと同じである[39]。COVID-19 の「パンデミック」の起源をめぐる議論は、次のような誤った二者択一の構図で進められている：(1)「人獣共通感染経路」（ウェットマーケット(生鮮市場) /コウモリの巣窟など）または、(2)「研究所からの流出」(偶然か意図的か)。しかし、この 2 つの選択肢に「HIV」を投入しても、ストーリーの全体像が崩れることはなく、むしろウイルスモデルの維持には多方面に役立っていると言える。

現状では、アメリカ人の 60%以上が COVID-19 の事例は人工的「ウイルス」によるものだと考えている。あらゆる点で、それは政府やグローバリストメディアにより容認されている主流テーマである。ウイルスモデルを保持する目的は、健康や科学の発展よりも、むしろ企業や社会政治的な利益にある。しかし、COVID の際に私たちが目撃したように、その側面は今や、強制と暴力を専売特許とする国家による強制執行を要するものであることは明白である。「研究所流出」や「機能獲得」といったシナリオを流布する者は、科学と人類の双方にとって不利益をもたらさないよう、あらゆるものの拠り所となっている科学的根拠を吟味するよう求められている。

> *「私たちは新たな試練に遭遇しているようだ。ウイルスモデル（あるいは偶像）崇拝的科学カルトによるロックダウンと乗っ取りをいかに避けるか？」*
> -アサ・ボクサー、2024 年[40]

参考文献＆注釈

[1] Pradhan, P., et al., "Uncanny similarity of unique inserts in the 2019-nCoV spike protein to HIV-1 gp120 and Gag," *bioRxiv*, 31 Jan 2020, available here: https://s.rfi.fr/media/display/22fb1820-f9a0-11ea-9ad9-005056bff430/02%20Uncanny_similarity_of_unique_inserts_in_the_2019-n.pdf

[2] https://www.biorxiv.org/content/10.1101/2020.01.30.927871v2

[3] https://www.biorxiv.org/content/10.1101/2020.01.30.927871v2.article-metrics (accessed 18 May 2024)

[4] "Coronavirus Contains "HIV Insertions", Stoking Fears Over Artificially Created Bioweapon," *ZeroHedge*, 2 Feb 2020: https://www.zerohedge.com/geopolitical/coronavirus-contains-hiv-insertions-stoking-fears-over-artificially-created-bioweapon

[5] "Is This The Man Behind The Global Coronavirus Pandemic?," *ZeroHedge*, 29 Jan 2020: https://web.archive.org/web/20200207012326/https://www.zerohedge.com/health/man-behind-global-coronavirus- pandemic

[6] * "Tyler Durden（ タイラー・ダーデン）″はウェブサイト上のアバターアカウント。

[7] Ibid.

[8] Ghebreyesus, T., "WHO Director-General's opening remarks at the media briefing on COVID-19 - 11 March 2020," 11 Mar 2020: https://www.who.int/director-general/speeches/detail/who-director-general-s-opening-remarks-at-the-media-briefing-on-covid-19---11-march-2020

[9] Peng Zhou, et al., "A pneumonia outbreak associated with a new coronavirus of probable bat origin," *Nature*, 12 Mar 2020: https://www.nature.com/articles/s41586-020-2012-7

[10] *2024 年 5 月現在、この記事へのアクセスは 147 万回、引用は 1 万 3000 回を超える: https://www.nature.com/articles/s41586-020-2012-7/metrics

[11] Bailey, M., *A Farewell to Virology (Expert Edition)*, 15 Sep 2022
日本語版『ウイルス学との訣別』：
https://drsambailey.com/wp-content/uploads/2024/03/A-FAREWELL-TO-VIROLOGY-Expert-Edition-JAPAN.pdf

[12] McDonald, J., "Baseless Conspiracy Theories Claim New Coronavirus Was Bioengineered", factcheck.org https://www.factcheck.org/2020/02/baseless-conspiracy-theories-claim-new-coronavirus-was-bioengineered/

[13] Ibid.

[14] Blake, A., "How the covid lableak became the American public's predominant theory," : https://web.archive.org/web/20230323042320/https://www.washingtonpost.com/politics/2023/03/16/lab-leak-theory-polling/

[15] https://childrenshealthdefense.org/wuhan-cover-up-book/?itm_term=home

[16] *『The Wuhan Cover-Up（武漢の隠蔽工作）』は、ロバート・マローン博士、ピーター・マッカロー医師、ジョセフ・メコラ医師、メリル・ナス医師を含む、「生物兵器」説支持者から高く評価されている：https://www.amazon.com/Wuhan-Cover-Up-Officials-Conspired-Childrens/dp/1510773983

[17] *『Top-level biosafety lab starts work（最高レベルのバイオセーフティ研究所、稼動開始）』の情報源は中国共産党系の新聞、中国日報に掲載された：
https://web.archive.org/web/20200221041639/http://english.whiov.cas.cn/ne/201801/t20180117_189133.html
The 2018 promotion stated that, "The central government approved the P4 laboratory in 2003 when the outbreak of severe acute respiratory syndrome [SARS-1] spread alarm across the country."

[18] https://en.wikipedia.org/wiki/COVID-19_lab_leak_theory

[19] Ibid.

[20] *2023 年、ZeroHedge（ゼロヘッジ）はウェルネス・カンパニー TM と提携した：
https://web.archive.org/web/ 20230824145304/https://www.twc.health/pages/zerohedge

[21] "The Real Umbrella Corp: Wuhan Ultra Biohazard Lab Was Studying 'The World's Most Dangerous Pathogens'," *ZeroHedge*, 24 Jan 2020:
https://web.archive.org/web/20200208094936/https://www.zerohedge.com/economics/real-umbrella-corp-wuhan-ultra-biohazard-lab-was-studying-worlds-most-dangerous-pathogens

[22] See for example: "Gain of Function Gaslighting", "Gain of Function Garbage", "Bioweapon BS", "When You Wish Upon A "Bio-Weapon" and "Lab Leaks and other Legends" at https://drsambailey.com/

[23] "The EcoHealth Alliance, presided over by Dr Peter Daszak, is one of the chief promoters of these zoonotic threat storylines": Bailey, M., Bailey, S., "Invent a Disease and Blame it on Animals" in *The Final Pandemic*, 2024: https://drsambailey.com/the-final-pandemic/

[24] "Watch Live: Peter Daszak Testifies Days After Whistleblower Documents Expose More About Dangerous Wuhan Research," *ZeroHedge*, 2 May 2024: https://www.zerohedge.com/medical/watch-peter-daszak-testifies-days-after-whistleblower-documents-expose-more-about-dangerous

[25] Dr Richard Fleming, 2022: https://www.youtube.com/watch?v=pjIdP5NrQg8 See also: Dr Jessica Rose, 2022: https://jessicar.substack.com/p/it-turns-out-that-the-prrarsv-motif Igor Chudov, 2022: https://www.igor-chudov.com/p/sars-cov-2-was-lab-made-under-project, 2024: https://www.igor-chudov.com/p/drunken-student-stole-madonna-statues and "Dr Ah Kahn Syed", 2021: https://www.arkmedic.info/p/how-to- blast-your-way-to-the-truth

[26] American physician and politician serving as the U.S. representative for California's 25th congressional district.

[27] "A Hearing with the President of EcoHealth Alliance, Dr. Peter Daszak," 2 May 2024: (from 57.16) https://www.youtube.com/watch?v=Gj9M5CJGykk&t=3435s

[28] "Envelope glycoprotein GP120 (or gp120) is a glycoprotein exposed on the surface of the HIV envelope. It was discovered by Professors Tun-Hou Lee and Myron "Max" Essex of the Harvard School of Public Health in 1984. The 120 in its name comes from its molecular weight of 120 kDa.": https://en.wikipedia.org/wiki/Envelope_glycoprotein_GP120 (accessed 20 May 2024)

[29] Bess, J., et al., "Microvesicles Are a Source of Contaminating Cellular Proteins Found in Purified HIV-1 Preparations," *Virology*, 1997: https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/9126269/

[30] "SDS-PAGE (sodium dodecyl sulfate–polyacrylamide gel electrophoresis) is a discontinuous electrophoretic system developed by Ulrich K. Laemmli which is commonly used as a method to separate proteins with molecular masses between 5 and 250 kDa.": https://en.wikipedia.org/wiki/SDS-PAGE

[31] "SDS-PAGE (sodium dodecyl sulfate–polyacrylamide gel electrophoresis) is a discontinuous electrophoretic system developed by Ulrich K. Laemmli which is commonly used as a method to separate proteins with molecular masses between 5 and 250 kDa.": https://en.wikipedia.org/wiki/SDS-PAGE

[32] "'H9 [derivative of HuT 78]' is a cutaneous T lymphocyte cell isolated from a 53-year-old, White male with lymphoma and can be used in cancer and immunology research.": https://www.atcc.org/products/htb-176

[33] *The Emperors New Virus? - An Analysis of the Evidencefor the Existence of HIV* (Documentary), 24 Apr 2011: https://www.youtube.com/watch?v=PQFxratWh7E

[34] The Perth Group, "The Emperor's New Virus?," 20 Sep 2011: https://www.theperthgroup.com/OTHER/ENVCommentary.pdf

[35] *"In email correspondence Julian Bess told the Perth Group, 'We agree that you can come to the conclusion from gel electrophoresis patterns that there are only quantitative differences between HIV and microvesicles [cellular debris]'. If Bess agrees that HIV and cellular material contain the same and same number of proteins, then he must also agree 'you can come to the conclusion' there are no HIV proteins and thus no HIV." 訳：「eメールのやり取りの中で、Julian Bess（ジュリアン・ベス）は The Perth Group（ザ・パース・グループ）に対し、『我々は、ゲル電気泳動パターンから、HIV とマイクロベシクル［細胞の残骸］には量的な違いしかないとの結論に達することが出来ることに同意する』と述べた。もし Bess が HIV と細胞物質が同じ種類のタンパク質を同じ数だけ含んでいることに同意するのであれば、彼は HIV のタンパク質は存在せず、したがって HIV も存在しないという「結論に達することが出来る」ことにも同意しなければならない」。
P26 from Papadopulos-Eleopulos, E., et al., *HIV– a virus like no other*, 12 Jul 2017: https://www.theperthgroup.com/HIV/TPGVirusLikeNoOther.pdf

[36] Bess, J., et al., "Microvesicles Are a Source of Contaminating Cellular Proteins Found in Purified HIV-1 Preparations," *Virology*, 1997: https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/9126269/

[37] *「未感染」サンプルにもかかわらず、Bess et al.（ベスほか）は 1997 年の研究で対照実験を行ったとは主張していない。ウイルス学者がなぜウイルスの存在を証明するために、細胞培養技術を用いた対照実験を行えないかについては、こちらを参照されたい：
Bailey, M., *Virology's Event Horizon*, 5 Apr 2024: https://drsambailey.com/virologys-event-horizon/

[38] "The Disclosures Of Peng Zhou et al." in Bailey, M., *A Farewell to Virology (Expert Edition)*, 15 Sep 2022: 「驚くべき Peng Zhou et al.論文詳細」日本語版『ウイルス学との訣別』：
https://drsambailey.com/wp-content/uploads/2024/03/A-FAREWELL-TO-VIROLOGY-Expert-Edition-JAPAN.pdf

[39] Papadopulos-Eleopulos, E., et al., *HIV– a virus like no other*, 12 Jul 2017: https://www.theperthgroup.com/HIV/TPGVirusLikeNoOther.pdf See also: Engelbrecht, et al., *Virus Mania*, 3rd English edition, 2021: https://drsambailey.com/shop-2/

[40] "The Will to Incorporation: Separating Science from State," 19 May 2024: https:// analogymagazine.substack.com/p/the-will-to-incorporation-separating